

JOMF 派遣医師便り (2012. 09)

◆マニラ◆

フィリピン洪水被害に対する緊急医療援助に参加して

マニラ日本人会診療所
菊地 宏久

2012年7月末からの台風や豪雨の影響でマニラ近郊でも洪水の被害が発生しました。さらに8月7日にはマニラ首都圏でも大雨と強風にみまわれ多くの方々が被災しました。朝はどうかタクシーを捕まえて診療所にたどり着きました。当日、患者さんも大雨・強風の中受診されました。重症の患者さんもいらっしゃいました。患者さんの一日も早い回復をお祈りしています。

今回は被災したマニラ首都圏内のマリキナ地区へ行ったこと、そして洪水が今も続くラグナ湖畔のモンテンルパでのNGO災害緊急ボランティア活動に参加したことについて話をしたいと思います。

マリキナ地区での被害はテレビでも大きく何度も取り扱われました。地域を流れる川が氾濫して2階建ての家の窓の高さまで水につかりました。

8月12日に妻とマリキナ地区に行きました。フィリピン人のボランティアの人たちは水浸しになった床の水を掃き出したり、被災した人たちは2階まで泥だらけになった家の掃除をしていました。我々が日本人だとわかると「津波の被害にあった福島の方々は大丈夫ですか」と福島のことを気遣ってもくれました。

マリキナ川堤防沿いには被災した人々や消防自動車、救急車も出動していました。巨大な消防自動車は日本から入手したとのことでした。消防自動車のそばで被災状況を住民に聞いていた妻に消防隊員が何か頼んでいました。気がつくと、なんと妻は巨大な消防自動車の身長よりも高い運転席に乗り込んでいるではありませんか。消防隊員たちは「自動車がアクションを起こすたびに車が日本語で何か話している、その話す指示が何と言っているかわからないのでずっと気になっていた、消防自動車に乗ってくれ」と言ったのだそうです。妻は操縦席に乗り込み耳を傾けましたが何も声が出ていない。そこで隊員は車でかなりの距離をバックしたり前進したりし始めました。すると日本人女性の「バックします」という声が車から聞こえたのだそうです。隊員が今度は消防自動車を大きく右折しました。するとまた日本人女性の「右へ曲がります」という声がしました。妻がそれらのことを消防隊員に説明すると「うーん」と言って嬉しそうに「わかった」と言ったのだそうです。

1週間後の8月19日に再度マリキナ地区に赴いた時にはマリキナ川の水かさも引き、一週間前には川べりと同じ高さだった水かさも、川べりから70cm位下に下がっていました。川べりのsari sari storeやレストランも一部開業し始めていました。

今回の洪水に対し、日本のNGOも被災地復興支援活動を始めていました。我々も日本のあるNGOに参加し活動しました。

8月20日(月)と21日(火)はフィリピンの祝日でしたので、20日は洪水で被災したラグナ湖畔のモンテンルパ地区に行き、洪水後の病気について聴き取り調査や診察を行いま

した。低地の地区 Tunasan ではまだ大人の腰の高さまで道路が水浸しになっていました。みなゴムボートで乗り降りしながら自宅までたどり着いていました。家の1階はほぼ水浸し、トイレの汚水も洗濯水も食事の水も同じ排水口からプカプカ浮かんで出てきます。きれいな水道水を得ることは不可能な状態で、衛生環境が非常に悪化していることが分かりました。

8月21日は洪水被災地区 Bayanan の学校の避難所（校庭）で診察をしました。体調の悪い人々が次々にやって来ました。高血圧症や糖尿病などの持病があり常薬が無くなってしまったお年寄り、下痢・腹痛や皮膚疾患で困っている子供たち、発熱や下痢で食事が摂取できない幼児などもいました。硬いコンクリートにビニールシートを敷いた床で離床もつらそうな肺炎の少女もいました。

疾患として最も多かったのは皮膚外傷・感染症、喘息発作を含む呼吸器疾患、続いて消化器疾患・下痢症などでした。ネズミや哺乳動物の尿に汚染された水や土との接触・経口感染で起こるレプトスピラ症疑いの患者さんもいました。病態が重傷なので病院で精密検査や治療を受けた方が良い患者さんも多くいました。この避難所は電気はありませんでしたが学校内の敷地内であったため、水道水とトイレは不十分ですが使用可能でした。

しかしその後、ビニールテントが何十軒も並ぶ川べりの避難所 Cupang 地区を訪れた時には更に驚くような状況を目の当たりにしました。400人以上の被災者に対し近くに水を供給する井戸は一つだけしかありません。しかも井戸から出てくる水は肉眼で見ても濁っていました。もちろん飲料水には全く適していません。彼らはその水を洗濯や頭・体を洗う水として使っていました。

そこに住む一人の親切な少年が現状を妻に話してくれました。電気が無いこと、きちんとしたトイレ設備は無く川べりや空き地でブロックで覆った簡易トイレで用を足していること、1週間に1度1家族3人分につき2kgのコメが配給されたこと、ビスケットが子供1人につき1枚ずつ配給されたこと、薬がこの避難所全体に対して配給されたこと、1食炊くのに6ペソの炭が2個必要なこと、医師か看護師が1週間に1度訪問してくれていることなどを話してくれました。その少年は私の妻をビニールとベニヤ板で囲った家に招いてくれました。3畳ほどの部屋には少年の姉夫婦とその赤ちゃん、そしてその少年の4人がいました。少年は自分たちにも貴重な飲み水を「のどが渴いたでしょう」と妻に勧めてくれたそうです。少年の心の暖かさや優しさを深く感じた、と言っていました。

この地区の疾患で最も多かったのはやはり皮膚外傷・皮膚感染症、そして消化器疾患でした。原因不明の発熱患者さんもいましたが、解熱剤で経過を観るしか仕方がない状況でした。

被災しているにもかかわらず「あなたたちは日本から来てくれたの？福島の方々は大丈夫？」と我々を気づかせてくれた人々、自分たちも辛いにもかかわらず暖かく笑顔で迎えてくれた少年たち、彼らは私たち人間にとって何が大切なのかを伝えてくれたような気がします。

一日も早い復興を祈っています。

注意していただきたいこと：

熱帯地域の災害地などでボランティア活動をされる場合には、皆さんご自身の健康にも注意しなければなりません。外傷はもちろん、蚊を媒介とするデング熱やマラリア、ネズミの尿などから感染するレプトスピラ症、創傷部位から感染する破傷風、犬・狐・コウモリなどに咬まれて発症する狂犬病などにも注意が必要です。ご自身の健康にも注意をしなければなりません。

心肺蘇生講習会 “世界に一つだけの命” 開催のお知らせ：

・第5回マニラ日本人会診療所「心肺蘇生講習会」を行います。
心肺蘇生用の人形を使って実習をしてみましょう。以前に参加された方もぜひご参加ください。動きやすい服装でいらしてください。

◇日時：9月29日（土曜）、13時30分～15時30分

◇場所：日本人会診療所待合室にて

◇テーマ：「世界に一つだけの命」

家族が、お子さんが、周囲の人が突然心肺停止を起こしたとき、
あなたにできることがあります！

年齢を問わず、みなさんが大切な命を救えるのです。

お待ちしております。

編集部注：日本語を話す消防自動車について

2010年10月29日開催：第12回海外医療情報交換会での菊地先生のお話で非常に印象に残ったのが、日本の救急車や消防自動車が中古車としてフィリピンで売られていることでした。今回、そのような車に先生が出会ったというエピソードをご紹介します。

写真は当日配布の資料『あっと驚く！マニラ医療事情』～住んでみないとわからない～に掲載されたものです。

